笑う才能

The talent that I can laugh at

1K10C238-3　高橋貴大
主査　寒川 恒夫 先生　　副査　礒 繁雄 先生

【目的】

人間にとって、とても大きな才能は、笑うことが出来ることである。それは、定期的なお笑いブームや、笑うことと健康の関係性。そして、何よりも、笑うというその文化に対して、マイナスになるような発言は聞かれない。それほどに笑うということが神聖であり、大事であり、人が思っている以上に、すごい事なのである。赤ちゃんの頃は、顔をおもしろくゆがませる親を見るだけできゃっきゃと笑っていた。それはほとんど差異なく、皆がその能力、才能を持っていた。そして中学、高校も、気の合う仲間とだけいるせいか、常に笑いは絶えなかった。しかし、大学に入り、少なからずアルバイトなどで大人と接し、就職活動でも初対面の人と話す。そういった新しいカテゴリーに入れられた時に、人はなかなか全ての事に笑わない。それは当然なのであるが、逆に、どんな場所、どんな内容においても、笑っていられるような素敵な人間もいるのである。笑う事に対してプラスのイメージしかない中で、その姿は、とても輝いて見える。そして、その人の人生が、笑うことによって幸せなのだと仮定すると、それはとてもすごい才能なのではないかと考えた。笑う事。それはお金にもならないし、受身のもので、決して努力してするものではない。ただ、努力が全くといって関係ないうえで幸せになれているからこそ、それは、私たちが思っている以上の素晴らしい才能なのではないかと思う。この論文は、本や実体験をもとにその才能との因果関係を、明らかにするためのものである。

【方法】【哲学】という、島田紳助と、松本人志の２人が書いた著書や、インフォーマント数人の発言、行動などをもとにあらゆる角度から、笑いと才能を見つめていく。

【結果】

島田紳助と、松本人志の発言を要約すると、『笑いは全て才能。』という一言につきる。「我々は、料理人みたいなものだ。』この言葉は特にわかりやすいのではないかと思う。『例えば、普通のおじさんが喋ったことを、一般の人はおもしろいと感じない。でも、我々は、その人が言った事を、おもしろいと感じるのだ。勝手に。なぜおもしろいのかというと、その話を自分の中で変化させているからだ。漁船から港に陸揚げされる大量の魚をみて、『うまそうだ。』という人もあまりいないだろう。そのただの魚を、誰も想像できなかったような料理に完成させるのが僕らの技術であり、感性なのだ。」まさに、この料理が出来るのかできないのか、それに尽きるものがあり、どうしたらこの料理が出来るのか。といったやり方は存在しない。それは、喋って、世の中の人を笑わせる段階の一歩手前である、1 つのモノを見て、おもしろいと思えるのか、思えないのか。笑えるのか、笑えないのか。その料理が出来るのか、出来ないのか。そこがあまり笑わない普通の人と、良く笑う人との才能の差なのである。

【考察】

やはり、笑うと言うことは本当に幸せなことであり、素晴らしいことである。一貫して笑いは才能だということを伝えた。それは、笑わせる側の人間はもちろん。そして、笑う側のほうもそれは才能なのである。2 人の天才的な人物を題材にした。一読していただければ、テレビだけではわからない笑いの理論。そして、それを当たり前のように行っている彼らのすごさ。さらには、そのすごさに全く気付いていない自分。もしくは、それを否定すらしていた自分に気付くだろう。まだ理解を出来ていない人間は、笑いにおける才能は皆無ととらえていいだろう。その才能は他の分野に活かすべきだ。しかし、笑うことを許されている動物は、人間だけである。とてもとても貴重な才能を与えられているのである。そしてそれは、現実的にも、貴重なものである。社会に出て、まじめ一辺倒の人間では、周囲の人間、上司、顧客など、接する全ての人との距離は縮まらないだろう。ユーモアと言い換えると伝わりやすいだろうか。ユーモアのない人間は罪であるとさえ思っている。それほどに、大事な部分であり、大切にしていきたいと考え、今回はテーマに挙げた。自分がおもしろくないと思っているモノ。コト。ヒト。全てに対してもう一度向き合ってほしい。『これをおもしろくないと捉えてしまう自分がおもしろくないのではないか。』もしこういったことを少しでも考えることによって、モノの見方が変わればそれはとても大きな前進だろう。